

研究プロジェクト一覧（平成25年度）

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	快感情の神経基盤	船橋新太郎
	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	河合俊雄
	ストレス予防研究とストレス緩和プログラム開発	カール・ベッカー
	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家 理
こころ観	こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
	精神と科学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
きずな形成	他者理解に関わる感情・認知機能	吉川左紀子
	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
	治療者・社会・病に関する意識調査：慢性疾患に関わる社会・倫理的問題	カール・ベッカー
	終末期に対する早期支援	清家 理
自然とからだ	癒し空間の比較研究 生態智の拠点としての聖地文化 —— こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
発達障害	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子
震災	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
幸福感総合	地域の幸福プロジェクト	内田由紀子
	国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行（東洋英和女学院大学准教授）
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）
高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山 薫（熊本大学文学部教授）
身体と象徴：自然・社会・人体のリズムの総合的研究	木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究Ⅱ	大西宏志（京都造形芸術大学教授）

研究プロジェクト

こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究 (人類はこころをどのようにとらえてきたか?)

鎌田東二(こころの未来研究センター教授)

■「こころの荒廃」の突破口としての「身心変容技法」

本プロジェクトの目的は、今日の日本社会が抱え込んでいる「こころの荒廃」の問題から抜け出す道を探り出すために宗教的リソース(技術と知恵)に着目し、その学術的・社会的な可能性を開くことにある。これまで鎌田研究室では、多様な思想的バックグラウンドにおける「こころ」の捉え方を整理し、「こころ観」の俯瞰的な地図の作成に取り組んできた。それと並行して、それぞれの宗教的伝統が培ってきた修行・修養・変容の技法を「身心変容技法」として捉え直し、神秘思想における瞑想、仏教における止観や禅や密教の瞑想、修験道の奥駆けや峰入り、滝行、合気道や気功や太極拳などの各種武道・芸道等々、さまざまな実践の諸相(特色)と構造(文法)を明らかにしてきた。2013年度は、これまで重ねてきた思想研究とフィールド調査に加え、神経科学的手法を導入し、「身心変容技法」の神経科学的機構の解明に着手した。それらをふまえて、各々の宗教的伝統における根源的な「こころの変容」を解明し、現代を生きる個人が活力を掘り起こしながら生き抜いていくことに資する研究成果を社会に発信することを目指す。

■研究会の概要

宗教的实践における「こころ」、および言語学における「こころ」の諸相を明らかにすることを目標として、内部研究会を開いた。

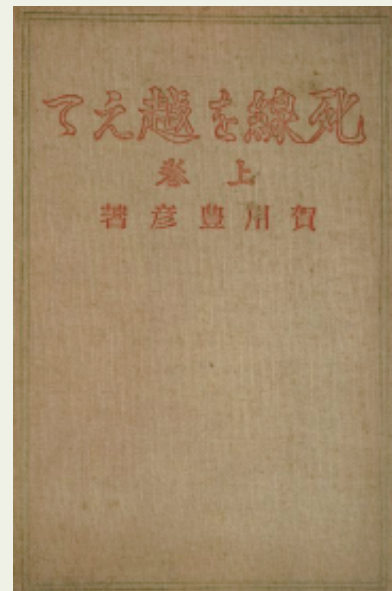
トマス・ヘイスティングス(Thomas John Hastings)日本国際基督教大学財団主任研究員を招いた研究会では、「賀川豊彦の思想と実践」の演題のもと、昭和初期の実践家賀川豊彦のキリスト者としての活動に着目し、その思想と今日的意義について議論した。伝道者

である賀川豊彦は、キリストの十字架の贖罪愛を基軸にしつつ、しかもそれを単に個人の魂における内的な救いにせず、社会の中で活動することによって信仰を貫いた。賀川は、贖罪愛の恵みに伴う「生命宗教」、「生命芸術」や「連帯責任の意識」といった概念を軸とした実践倫理を練り上げて、今日の「生協」の前身となる組織「神戸コープ」を設立するなど、日本のプロテスタントの教会史の中でユニークな活動を重ねた。それは、彼自身の「こころの変容」を探るのみならず、今日の社会活動を見直す意味でも重要な参照点となるであろう。

青木三郎筑波大学大学院教授を招いた研究会では、日本語の「こころ」という語を世界の言葉に翻訳するとどうなるかという素朴な疑問に答えるために、多様な言語の専門家と協同し、「こころ」に関する表現をまとめて分析することを試みた。「こころ」という語彙自体がもつ意味は多義的であり、かつ対応する他(多)言語における語彙も多義的である。「こころ」は、人間に関しては、思慮・分別、情趣、予期、感情、思いやり、意志、望みなどの知情意、物事に関しては、本質、内情、内容、風情などを意味するようになる。こうした「こころ」の壮大な意味の網の目を明らかにするためには、内臓・人間(知情意)・事物(内容)の関係を軸として、語彙および用例を綿密に収集・整理することが必要となる。

■シンポジウム

プロジェクトの成果報告として、シンポジウム「ワザとこころパートIII～天神信仰と天神の祭り」を行った。地元京都・大阪の文化の深層を再発掘するシリーズの第三弾である。京都を代表する祭り「祇園祭」に込められた「ワザとこころ」を探る。上田正昭氏(京



賀川豊彦『死線を越えて 上巻』

都大学名誉教授)、寺井種伯氏(大阪天満宮宮司)、加藤迪夫氏(北野天満宮権宮司)、竹居明男氏(同志社大学文学部教授)とともに、研究者、表現者、祭りの担い手が、それぞれの持ち場と観点からテーマに即して問題提起や報告をし、ディスカッションを行った。

天神信仰と祭りのルーツとなった菅原道真の人物像や、道真公を天神へと至らしめた歴史的背景と経緯、北野天満宮創建の経緯、神社祭祀の三要素、祀りの地、祀りを司った歴史的人物の解説、あるいは、何度も火災焼失などに襲われながら復興を繰り返した大阪天満宮の歴史、人々に愛され支えられた天神祭の歴史、現在も続くさまざまな祭事に関する詳細な記録や年表などが紹介され、天神信仰の生き生きとした諸相に触れるシンポジウムとなった。

参考文献

- トマス・ヘイスティングス「賀川豊彦—科学的な神秘主義者」『モノ学・感覚価値研究』第8号、2014年3月。
『身心変容技法研究』第3号、2014年3月。
『ワザとこころパートIII 天神信仰と天神の祭り シンポジウム』報告書、2014年2月。

こころとモノをつなぐワザの研究

——伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■ワザ学

「ワザ（技・業・術）」とは、物の世界に形を与え、人間世界に広がり深みをもたらすことを可能にする、こころとモノとの媒介通路を意味する。人間はこれまでに、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かなワザを創造、継承、改変してきた。このようなワザに着目し、人間のこころと、物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味することによって、「物は豊かだがこころは貧しい」と言われる今日において、こころと物とのつながりを取り戻し、生の豊かさを切り拓く道を模索する。平成25年度は、世阿弥研究会、フィールド調査、一般公開シンポジウムを行った。

■世阿弥研究会

観世流能楽師河村博重氏を交え、毎月2回、世阿弥の書き残した「伝書」を読解することによって、言葉によってワザを記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを目標としている。世阿弥後期の思想は、台頭する能の諸

座に遅れをとりつつあり、舞台の一戦からは退いた立場において紡ぎ出されたかのような、観念的な思索、あるいは愁いを帯びつつも達観した思索であると特徴づけることができる。だがそうした世阿弥の文体こそ、一座主として、一舞い手としての生きた思索の現れでもある。世阿弥が筆に託したその思索は、能という

1つの活動の枠を越えて、今日におけるワザの活動全般に、またワザに関わる思想の追求にとって参照点と捉えられる。

■フィールド調査

具体的なワザの働きを分析することを目的として、淡路島の人形浄瑠璃の一座に対する調査を行った。具体的には、人形遣いの「わざ」の稽古場面、および興行場面の観察・分析を行うことで、「身体による学び」の可能性を探ることを目指している。

淡路島での調査の一環として、2013

年6月と2013年10月、全国の学校に出向いて行う「次代を担う子どもの芸術体験事業」（出張公演）に同行し、学校の中での教育的活動を行う淡路人形座の座員たちの様子を調査した。学校教育と伝統芸能は、必ずしも相性のよいものではないと考えられるが、あえて座員たちは、学校教育という枠組みの中で身体を用いた豊かなやり取りを仕掛け、子どもたちの人形体験を生き生きしたものに導いている。その際、座員たち



張明亮老師による一般向け実習

は公演を「現代の巡業」として、今日の重要な取り組みの1つと位置づけており、「体験授業」を期待する学校側の思惑とは異なる次元で動いている。それは、江戸時代に全国を行脚した旅芸人の末裔として、自分たちもまた全国の学校に出向き、舞台を見せるという活動である。座員たちは、教育的活動を越えて舞台を展開するという、一演者として、等身大のままに子どもたちに対峙する姿が見受けられた。共同体の時間を背負ったワザの継承のありようのなかに、身体において学ぶことのままならなさや豊かさが見てとれよう。

■一般公開シンポジウム

平成25年度は、中国における気功（峨眉派）の第一人者である張明亮老師を迎え、一般公開の国際シンポジウムを開催するとともに、気功の実践の場を市民に向けて提供するために一般公開の実習を行った。当日は定員を大幅に越える100名近い市民の参加を得て、好評を博した。

参考文献

奥井遼『わざの臨床教育学——淡路人形座における人形遣いの稽古および興行に関する現象学的記述』学位請求論文（博士〔教育学〕）2013年12月。

開催	テキスト	キーワード
4月	九位	妙花風、寵深花、風閑花風、正花風、広精風、浅文風、強細風、強鹿風、鹿鉛風
5月	六義	妙花風、寵深花、風閑花風、正花風、広精風、強細風
	五音曲	祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲
6月	夢跡一紙	（該当なし）
7月	却来花	却来
	金鳥書	（該当なし）
8月	五音	祝言、幽曲、恋慕、哀傷
9月	書簡	得法以後の参学
10月-3月	風姿花伝	誠の花、時分の花、老木に花、黄鐘・盤渉、貴人（見所）

世阿弥研究会の活動

研究プロジェクト

ヒマラヤ宗教精神の研究

熊谷誠慈（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

2008年の北京オリンピック開催直前、「世界の屋根」と称されるチベットの首都ラサで大規模な騒乱が勃発し、チベット民族と漢民族の間にくすぶり続けるいわゆる「チベット問題」が国際社会において、にわかに脚光を浴びた。わが国のメディアも連日、異例とも言える扱いで、これを大きく取り上げた。また、東日本大震災がわが国を襲った2011年にはヒマラヤの小国ブータンから国王夫妻が来日し、GNH（国民総幸福）政策を標榜する「幸福立国」からの来訪者として、その言動が広く大衆の関心を集めたことは記憶に新しい。このように、昨今わが国にとって、チベットやブータンに代表されるヒマラヤ地域は以前と比べて格段に身近なものとなり、その動向に関して、諸種のメディアを通じてたくさんの情報が流入してくるようになった。しかし、それらの大部分は、ヒマラヤ地域が現代の国際社会においてどのような政治性を持っているか、という点にのみ焦点を当てたものに限られており、長い歴史の中ではぐくまれ、人々の暮らしや生き方の中に深く根を下ろした同地域の文化的特性、とりわけその精神性についての理解はまだまだ十分とはいえないのが現状である。

以上のような背景から、われわれは本プロジェクトにおいて、ヒマラヤ地域の文化、精神を象徴する位置を占める「チベット仏教」と「ボン教」という2大宗教を中心として、同地域の宗教・伝統的精神の包括的な解明に乗り出すことを決めた。なお、「チベット仏教」は7世紀以後、ブータン、ネパール、シッキム、ラダック、北東インド、中国西部、さらにはモンゴルにまで広汎に伝播し、それぞれの地域で土着化が進んで、地域色豊かな独自の展開を遂げている。一方、「ボン教」について

はいまだ謎に包まれている部分が多く、詳しくは今後の調査を待たねばならないが、これらの地域の大半で、仏教ほどの浸透度はないものの、ほぼ同様の広がりを見せているのではないかと予想される。したがって、本研究は、これら2大宗教が広大な土地を跨いでどのように伝播したか、そして、どのように地域化していったかという問題にも取り組むことによって、広くヒマラヤ文化圏全般における宗教的精神の普遍性・共通性と、地域性・個別性の双方を理解することを目指す。

■研究の方法・内容

本プロジェクトでは、「ヒマラヤ宗教研究会」を定期開催し、「仏教」と「ボン教」というヒマラヤ文化圏の2大宗教を中心として、同地域における宗教的精神のありようを、宗教哲学、歴史学、文化人類学などの視点を通して、多角的・包括的に検証していく。

「仏教」については、1.「チベット仏教」、2.「モンゴル仏教」、3.「ブータン仏教」、4.「その他ヒマラヤ地域の仏教」と区分し、「ボン教」については、1.「チベットのボン教」、2.「ブータンのボン教」、3.「その他ヒマラヤ地域のボン教」と区分する。

このうち、「ブータン仏教」と「ブータンのボン教」の研究については、別途推進している「ブータン仏教研究プロジェクト」と連動させる。

また、これらの領域すべてを横断するヒマラヤ宗教全般に関する研究についても、別途推進中の「思想と科学との対話を通じたこころ観の再構築」プロジェクトと連携する。

■研究会・ワークショップ

[イベント名] 第1回京都大学ヒマラヤ宗教研究会

[日時] 2013年9月13日（金）17:00～

18:30

[場所] 京都大学こころの未来研究センター225会議室

[司会者] 熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

[概要]

ヒマラヤ地域には、チベット仏教やヒンドゥー教、ボン教、さらには地域ごとの土着信仰など、さまざまな形の宗教が存在しているが、その文化的影響はインドから中国、遠くモンゴルにまで及ぶ。しかしながら、通常、これらの研究は地域ごと、分野ごとに細かく棲み分けて行われるため、同じヒマラヤ地域の宗教文化を対象とする研究者でありながら、相互に情報を交換したり、共有したりするのは難しいのが現状である。

そこで、このたび、こころの未来研究センターは、ヒマラヤ地域の宗教およびその文化に関する研究に取り組む若手研究者が集うことによって、互いの研究情報を交換し、若手間の交流を活性化することによって、日ごろ研究者の間を隔てている垣根を取り払い、ヒマラヤ圏の宗教文化研究を1つの全体として底上げすることを目指して、「京都大学ヒマラヤ宗教研究会」を立ち上げた。

第1回の研究会では、国内の若手研究者が集まって当研究会の方針を確定するとともに、今後のヒマラヤ宗教研究のありかたや方向性について議論を交わした。今後、定期的に研究会を開催するとともに、メーリングリストやSNSなどを用いて、参加者各自の研究の内容やその進捗具合について、適宜情報交換を行い、参加者間の連携を密接なものにしていく予定である。

他者理解に関わる認知・感情機能：直接対面 vs. 映像対面での表情表出

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授) + 上田祥行(同センター特定助教)

■研究目的

メディア技術の進歩によって、人間のコミュニケーションのあり方は多様化している。インターネット電話サービスでは、モニタ映像を介して間接対面によるオンラインのやりとりが可能となり、遠方にいる他者とのコミュニケーションを促進するツールとして活用されている。通信速度の高速化で映像や音声のタイムラグもほとんど気にならなくなり、映像を介した対面コミュニケーション(映像対面)と直接対面の差異はほとんどなくなっているかのようである。しかし、Ponkanenら(2008)は、対面で直接他者を見た場合とマネキンを見た場合の情動経験の差異が、モニタ画像で他者を見たときとマネキンを見たときの比較ではみられないことを報告しており、直接対面と映像対面でのコミュニケーションの特性についてはさらに詳細な比較検討が必要である。

本研究では、「他者が発する、ポジティブ、ネガティブ、中性のいずれかの情動価をもつ発話を聞く」という課題場面を設定し、直接対面と映像対面において聞き手の情動経験と表情表出にどのような差異がみられるかを検討した。

■研究方法

発話者は2名の女子大学生、実験参加者は57名の学生・院生であった。実験は2つの実験室で行われ、直接対面条件(図1a)では実験室Aに発話者と実験参加者が入室し、映像対面条件(図1b)では実験室Aに実験参加者、実験室Bに発話者が入室して実施された。実験室AとBの見取り図を図1cに示した。発話者は、ポジティブ、ネガティブ、中性の意味内容を含む短いメッセージ(楽しいです、イライラする、眠いです、など)およびエピソード(発

話時間:約40秒)を実験参加者に向かって語り、そのときの実験参加者の表情を机上の小型カメラで撮影した。実験参加者は、発話ごとに情動経験(不快と覚醒度(覚醒—不覚醒)の2次元で評価した。発話とそれに対する評価が終了したのち、発話者に対する印象評価と実験状況に対する質問を行った。

■研究結果と考察

紙面の都合で主要な結果の要点のみを記載する。発話を聞いたときの情動経験、発話者の印象評価、実験状況に対する評価については、いずれも直接対面条件と映像対面条件間に差はみられなかった。発話を聞いているときの実験協力者の表情については、各試行ごとの映像クリップを作成して、2名の評価者が実験協力者の表情の情動価(とてもネガティブ—とてもポジティブの5段階)を評価した。短いメッセージを聞いているときの表情については、直接対面条件と映像対面条件間に有意な差異はみられなかった。一方、エピソードを聞いているときの実験参加者の表情については、エピソードの情動の種類と対面条件の交互作用が有意となり、ポジティブなエピソードを聞いているときに、映像対面条件に比べ、直接対面条件でよりポジティブな表情表出がみられることが分かった。

情動的な内容の発話

を聞くという状況において、主観的な情動経験や発話者に対する印象評価、状況の評価といった意識的な判断では直接対面と映像対面に違いはみられなかった。違いが見られたのは、ポジティブな内容のエピソードを聞いているときの表情表出であった。楽しい話題の話の聞いているときに、直接対面のほうがよりポジティブな表情になるのである。楽しいエピソードを語る語り手の情動が直接対面ではよりストレートに伝わり、より強い共感が生じて、聞き手の表情表出に影響したのかもしれない。共感のプロセスが対面条件によってどのように異なるのかをより詳細に検討することが今後の課題である。(本研究は、石田彩夏、布井雅人との共同研究である)。

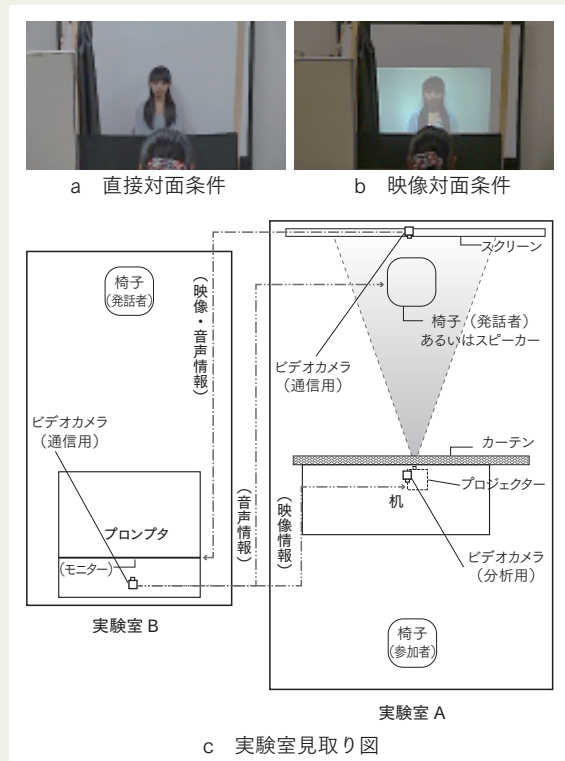


図1 実験状況
直接対面条件では実験室Aで実験参加者と発話者が対面した。映像対面条件では、実験室Aと実験室Bが用いられ、実験参加者は実験室Aに、発話者は実験室Bにいる状態でスクリーン越しに対面した。

研究プロジェクト

コミュニケーションの言語・文化的基盤

内田由紀子(こころの未来研究センター准教授)

■研究目的

科学研究費補助金基盤研究B(研究代表者:名古屋大学唐沢稔教授)の分担研究として実施した本研究は、コミュニケーションにおける言語の持つ影響ならびに文化的習慣や価値観がもたらす影響の双方を検証し、文化心理学と言語学の共同的知見の確立を狙うことを目的にしていた。特に本研究では日本における援助にまつわる言語表現との関連を検討した。

■研究の背景

これまでの文化心理学的知見により、援助場面においては、北米では互いの行動に際しての相手の意図の確認が重視されるのに対し、日本では状況要因に着目し、相手の意図を自発的に読み取って行動することが必要とされることが示されてきた(Kim et al., 2006; 内田・北山, 2001)。また、アジア圏では受け手が自ら援助をリクエストする頻度が北米より低く、むしろ援助者が困っている相手の状況を察して申し出を行うことが頻繁に見られるとされている。言語表現においても文化差があることが知られている。たとえば吉成(2007)によると、援助者の表現において、英語話者では“Do you want to use this pen?”のように相手の意図や願望を確認する表現の出現頻度が高いが、日本語では特に目上に対してこのような表現を用いることはタブー視され、実際に出現頻度も低く、かわりに「ペン貸しましょうか」という申し出の表現や「ペン使いますか」のような援助者の行為(ペンの貸与)を前提とした行為質問の表現の使用がみられる。そこで本研究では援助場面における言語使用ならびにその際の状況や文化学習の程度の関連を検証することとした。

研究1)「援助のやりとりに関する意図確認: 確認的発言が及ぼす影響」の研究を実施した。特に援助のやりとりにおける言語表現において、援助者からの申し出と被援助者からの依頼のどちらがよく行われるか、さらにはその際「明示的」と「暗黙」のいずれの表現が用いられるかを検討した。調査参加者には援助をした場面(もしくはされた場面)について記憶再生の自由記述を行ってもらい、その際の認知・感情の評定をもとめた。具体的には援助場面の描写とそこでなされた会話を再生記述してもらい、その後、援助のやりとり後の関係性や感情、関係の親しさなどを評定してもらった。これにより、言語表現が関係性の認知に与える影響を検証することが可能になる。平成25年度にはイギリスのプリマス大学で調査を実施した。今後、平成24年度までに収集された日本語話者でのデータとの比較を進める予定である。

研究2) 表現そのものについての言語学的検証

援助にまつわる会話表現を上記調査において収集し、日本語における援助表現の特徴を検討する。上記2つの知見をあわせて、日本語の表現と関係性の認知との関連を検証した。特に「テモラウ」「テクレル」表現とそれに関する認知について分析を進めた。その結果、自分の援助受け取り経験について、再生された援助者と自分との間の会話内で「与え手からの申し出(～しましょうか)」があった場合には、その状況を「テクレル」を用いて記述する傾向が見られた(たとえば「Aさんが私に傘を貸してくれた」など)。2つ目の調査ではテクレルあるいはテモラウで記述された状況文(たとえば「AさんがBさんに傘を貸してあげました」)を呈示し、その状況における援助の与

え手と受け手の会話を想像して記述してもらった。するとテクレルを含む状況文に対しては、与え手からの申し出表現を会話内に含む傾向が見られたが、テモラウを含む状況文に対しては会話内の依頼表現・申し出表現双方が見られた。

研究3) 研究1で収集した援助場面(傘がない人に傘を貸す、荷物が重そうな人を手伝うなど)を日本語母語話者ならびに日本語学習中の留学生に提示し、想定される会話を書き込んでもらう調査を実施した。現在分析中であるが、援助者からの申し出表現は日本語母語話者でより多い傾向が見られており、これらの表現と文化への適応の傾向を検証する予定である。

■対外活動ならびに成果の発表

これまでの調査結果は、平成25年に行われた日本心理学会にて発表され、現在は論文執筆を行っている。

内田由紀子・吉成祐子・京野千穂「言語と文化援助行動における言語表現の検証」“ワークショップ: 言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会(沖縄国際大学、宜野湾市) 2013.11.3.

吉成祐子・内田由紀子・京野千穂「援助行動における言語表現: 第2言語習得の観点から」“ワークショップ: 言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会(沖縄国際大学、宜野湾市) 2013.11.3.

京野千穂・内田由紀子・吉成祐子「授受表現テモラウ・テクレルが示す話者の感情と認知」“ワークショップ: 言語と心のインターフェイス”、日本社会心理学会第54回大会(沖縄国際大学、宜野湾市) 2013.11.3.

癒し空間の比較研究 生態智の拠点としての聖地文化

— ところ・場所・癒しの研究

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)

■癒し空間の特色

「古事記」や「日本書紀」といった神話、各地方に伝わっている民話のなかで語られている日本各地の「聖地」を調査することによって、「場所に宿るところ」の諸相を明らかにしてきた。西田哲学の「場」の理論や「拡張された心」理論が述べるように、「こころ」は実体的なものでもなければ人間の身体に内属するものでもない。それはむしろモノや場所との関わりの中で常に移ろいながら想起され続けるものである。本研究では、寺社や聖地などの「癒し空間」に加え、負の感情を昇華させる装置としての「祭り」などに蓄積されている「場所の記憶」や「場所の力」を、宗教学的・哲学的・芸術的・社会的観点から多角的に分析し、「場所」において立ち現れる「こころ」の諸相を呈示し、記憶・感情・崇高さを想起させる場の特色とその心的メカニズムを突き止める。その先に、現代社会の「こころ」をめぐる諸問題を打破する突破口を模索していく。

■ 杵岐・対馬調査ほか調査概要

平成25年度は、5回のフィールド調査、1回のシンポジウムを行った。調査については以下のとおりである。

- 1) 杵岐・対馬調査：2013年5月2日～6日
- 2) 第6回東北被災地追跡調査：2013年8月30日～9月3日
- 3) 出雲大社～天橋立（山陰の聖地調査）：11月3日～4日と7日
- 4) 第3回羽黒修験道「冬の峰入り・松例祭」調査：2013年12月30日～1月1日
- 5) 天河大辨財天社例大祭・鬼の宿・節分祭・立春祭調査：2014年2月2日～4日

対馬と杵岐に伝わる延喜式内社とシャーマニズムの特異性を明らかにする

杵岐・対馬調査		
5/2	対馬	住吉神社 多久頭魂神社 高御魂神社
5/3	対馬	太祝詞神社 敷島神社 阿麻氏留神社 和多都美神社 海神社 天神多久頭魂神社 能理刀神社 霹靂神社 嶋大國魂神社 厳原の八幡宮神社
5/4	対馬	宗家菩提寺万松院 厳原八幡宮神社
	杵岐	市寸島神社
5/5	杵岐	国津意加美神社 稲荷神社 聖母宮 掛木古墳玄室 阿多弥神社 前方後円墳双六古墳 住吉神社 天手長男神社 塞神社
5/6	杵岐	国津神社 (鬼の足跡) 国片主神社 月読神社 興神社 高御祖神社

ために、神社を中心とする当地の「聖地」を調査した。杵岐・対馬は「卜部」による「古い」の拠点であり、京都大学東隣の吉田神社とも「卜部一族」を介してつながっている。卜部は、もともと亀の甲羅を焼いて吉凶を占う「亀卜」に従事する品部で、中でも、伊豆と杵岐・対馬の卜部は特別に取り立てられて宮中神祇官の官人となった。全国の延喜式内社は、3132座、2861社あるが、対馬国には29座（大6座・小23座）、杵岐国には24座（大7座、小

17座）もある。畿内を除く他の地域と比べても圧倒的な数を誇る杵岐・対馬は、日本古代の信仰を探るための重要な拠点となると考えられる。調査で訪れた神社は左表のとおりである。

■久高島研究



癒し空間としての久高島の歴史研究、地理研究、民俗史的研究を通じて、久高島という聖地のありようを探求した。夏には久高島へのフィールド調査を行い、今日の祭りの様子に関するインタビュー調査、参与観察を行う。ポケゼミ「久高島研究」の参加学生とともに、島の聖地を歩き、また島民たちにインタビューすることによって、「神の島久高島」の来歴と現状を深く掘り下げることができた。

また、「久高大運動会」では、前日と当日の朝の準備から手伝い、運動会にも最初の行進・開会式から最後の閉会式までフル参加し、リレーや障害物競走やフォークダンスや綱引きなど、一般参加できる競技には積極的に出場しながら、島における運動会の位置づけ・島民たちの行事に対する態度などを関与的に調査した。

参考文献

鎌田東二『歌と宗教——歌うこと。そして祈ること』ポプラ新書、ポプラ社、2014年。
鎌田東二編『究極 日本の聖地』KADOKAWA、2014年。

研究プロジェクト

子どもの発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■子どもの発達障害とプレイセラピー：これまでの実践と成果

学校や医療機関などで、発達障害は現在も主要な問題のひとつとなっている。こうした現場では、当人や家族の特性理解を進め、環境調整をし、適応的行動や具体的スキルの学習を目指すといったような、教育的・訓練的な発想が強くなっている。発達障害の子どもはちょっとしたコツがわからずにつまずいていることも多いため、このようなサポートの有効性が強調されることも多いのであろう。

一方、本プロジェクトは、これまで臨床事例研究として専門家に向けてのみ示されてきたプレイセラピーの有効性を定量的視点からも示し、その意義を広く発信することを目指している。プレイセラピーとは、守られた枠組みの中で子どもが自由に遊ぶことを基本としている。子どもの自発的な遊びのなかにその子の心理的なテーマが現れ、専門的視点をもったセラピストと共に、子どもは遊びながらそれに取り組んでいく。こうしたプロセスは、環境調整などに比して時間を要し、直接的な効果は少ないという印象があるかもしれない。しかし、本研究のこれまでの成果からは、子どもの「心理的な」変化を目指しているはずのプレイセラピーにおいて、6カ月間のセラピーの間に発達指数が上昇したり、領域間のバランスがよくなるケースがみられることが明らかになってきている。変化があった事例について詳しく検討してみると、子どもの「身体軸」が確立したり、セラピストとの関係のなかで「自他の境界」が明確になったりと、遊びのなかに子どもの発達の能力が伸びる素地が確かに育っていることが示唆されていた（井芹ら、2014）。

■発達障害に「見える」子どもたち

ところが、実際にセラピーを開始してみると、発達障害という診断を受けた子どもであっても、そうとは見立てられない子どもが多いことがわかってきた。4割にものぼったこれらの事例を過剰診断や診断ミスと考えることも可能だが、実際、何らかの「発達障害らしさ」を感じさせる行動や言動が根拠となっている場合も多いのではないかとも思われた。加えて、これらの事例のなかには保護者に（も）発達障害の傾向が認められる事例が含まれていることが明らかとなってきた。

そこで、本プロジェクトでは、センター内のプレイルームで行った、子どもへの週1回のプレイセラピーおよび月1回の保護者面接について、親子それぞれの見立てを整理し、総合的な事例検討を試みることにした。以下にその概要を示したい。

■発達障害の子どもと家族関係

本来、保護者面接とは、保護者の抱える不安を受けとめ、親が子どもや自身を見つめ振り返る場として設定される。「発達障害の子×非・発達障害の保護者」の事例では、保護者が日常でも細やかに子どもを観察し、関わることでセラピーと相補的に作用するプロセスがみとれ、元来想定していたセラピーの体制が機能することが多い。

一方、「非・発達障害の子×発達障害傾向の保護者」の事例では、子どもの行動や成長、変化などを保護者が「わからない」と感じ、理解できないものとして語り、対応していることが、子どもを「発達障害的」に見せている側面がみられた。このようなケースでは、保護者面接のなかで担当セラピストと共に子どもの変化を捉えることで混乱が収まり、親子関係が変化する展開がみられた。また別の事例では、家族全

体が区切りのないひとつの塊のような状態であった。プレイセラピーでも子どもははじめ、際限のない遊びを繰り返していたが、セラピストとの違いを確認したり、自分の作品を完成させるなどの遊びを通じて、言葉や身体軸が安定した。また、こうした子どもの変化が家族全体のあり方をも変化させているようであった。

これらの検討から、家族内の関係がうまく機能していないために子どもが発達障害の診断を受けているケースがみられることが明らかになった。このような事例では、家の中で閉じていたユニークな対人様式や関係性が外部に向けてあらわになることが重要な契機となりうる。学校や地域の行事などで社会に参加してはいても、心理学的にみて家が外部と接触していないことはしばしばみられ、そのような場合には、子どもが他者や環境と関わる能力が十分に伸びないままにとどまってしまう可能性があるといえよう。

本プロジェクトでは発達障害の子どもも、診断は受けているが本来的には発達障害でない子どももどちらも受け入れている。プレイセラピーを通じて、その双方に展開や変化がみられるのが興味深い。ただし、ここでは発達障害の問題を親子いずれかに還元することが重要なのではない。子どもを発達障害に見せていた問題がどのように生じているのかを明らかにすることで、家族成員それぞれの本来的な力がそのまま生かされ、うまく関わり合うようになっていくことが重要である。

本研究は研究自体が実践であり、援助となっている。プレイセラピーを希望される方はセンターのウェブサイト「センターからの募集」欄をご覧ください。

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

田村綾菜 (昭和女子大学人間社会学部助教) + 小川詩乃 (京都大学霊長類研究所大学院)

+ 吉川左紀子 (こころの未来研究センター教授)

■支援のやり方

本研究プロジェクトでは、2007年11月から発達障害の子どもを対象として継続的な学習支援・コミュニケーション支援に取り組んできた。プロジェクト開始当初は、7名の子どもとその保護者を対象に週1回のペースで、読み書きを中心とした学習指導をすることにより、支援のノウハウを蓄積した。現在では、約40名の子どもとその保護者を対象に、1名あたり2カ月に1回程度の頻度で個別の学習支援・コミュニケーション支援を行っている。

■アンケートの結果

研究に協力してくれた子どもの保護者を対象としたアンケートの結果 (田村ら, 2014) では、「漢字が覚えやすくなった」「文章を書く時の間違いが減った」といった学習に関する意見や、「国語の授業への苦手意識が減ったように思う」「初めてのことで、やってみようと思えるようになった」といった学習への動機づけに関する意見があった。また「学校の集団生活に頑張りが過ぎて中、ここではゆっくり学習できる。ほめていただいてやる気につながる」「すごくほめてくださるので、帰る時は本人がすごく生き生きして楽しそう」といった意見のように、支援頻度は低くても、落ち着いた一対一の場面で子どもと向き合う時間そのものに意味があると考えられた。さらに「漢字の習得などにどのような手助けをしたら良いか分かった」「見せて教えれば、理解が進むと実感した」「いろいろ説明してもらって、できないと思っていたことができていたなど、少し親として安心できることが増えた」といった意見のように、保護者との関わりが効果的な支援につながると実感している。

■支援につなげるための実験的な研究の1例

また、上述したような個々の特徴に合わせた支援により、研究協力者と支援を通したラポール (信頼関係) 形成ができ、支援につなげるための実験的な研究を行うこともできるようになった。以下に、その1例を紹介する。

物語文を理解するためには、複数の登場人物がさまざまな出来事に直面し、いろいろな気持ちや考えを抱えながら、問題の解決を試みるといった複雑な内容を思い浮かべる必要がある。これまでの研究から、物語を理解する力と、他者の視点に立って他者の気持ちや考えを認識する力 (視点取得能力) には強い関連があることが示されている。共同研究員の常深浩平らは、視点取得が苦手とされる自閉症スペクトラム障害のある小学生を対象に、物語教材を通した視点取得能力育成の試みを行った (Tsunemi, et al., 2014)。

夏休み中の1週間程度、独自に作成した8つの物語を家で読むという宿題に取り組んでもらった。そして、その宿題に取り組む前後で、視点取得課題 (図1) の得点に変化がみられるかどうかを検討した。宿題に取り組んだ子どもたちと、取り組んでいない子どもたちの得点の変化を比較した結果、宿題に取り組んだ場合に得点の上昇した子どもが多いことがわかった。このことから、物語を読むことを通して、視点取得能力を育むことができる可能性が示された。さらに、約4カ月後に再び視点取得課題を実施したところ、同様の結果が得られ、物語を読んだ直後だけでなく、ある程度効果が持続することも確認された。なお、夏休みに宿題に取り組まなかった子どもたちには、冬休み以降に取り組んでもらった。しかし、物語を読む行為のどのような部分が視点取得能力の向上につながった



図1 視点取得課題の模式図 (荒木, 1988を参考に作成)

「お父さんと木登りをしないと約束した女の子が、木から降りられなくなってしまった子猫を助けてと頼まれたら、どうしたら良いのだろう?」といった質問をし、自由回答形式で答えてもらう。

のかについてはわかっておらず、今後検討していく必要がある。

今後も多様な視点を取り入れて、継続的な支援を実施するとともに、発達障害の実態に即した研究を展開してゆく計画である。

引用文献

- 荒木紀幸 (1988) 役割取得検査マニュアル
トーヨーフィジカル
- 田村綾菜・伊藤祐康・小川詩乃・吉川左紀子 (2014) 京都大学こころの未来研究センターにおける「発達障害の学習支援・コミュニケーション支援」プロジェクトの取り組み, 第55回日本児童青年精神医学会総会抄録集, p.243
- Kohei Tsunemi, Ayana Tamura, Shino Ogawa, Tomoko Isomura, Hiroyasu Ito, Misako Ida & Nobuo Masataka (2014) "Intensive exposure to narrative in story books as a possibly effective treatment of social perspective-taking in schoolchildren with autism" *Frontiers in Psychology*, 5:2, doi: 10.3389/fpsyg.2014.00002

研究プロジェクト

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

毎年3月の恒例行事となっているこころの科学集中レクチャーであるが、2013年度のテーマは「文化、進化と心：人間すなわち文化的生物の不思議に迫る」。2014年3月4日から6日の3日間にわたって実施された。講師陣はこころの未来研究センター特任教授で本レクチャーのコーディネータである北山忍先生、生理心理学、認知科学がご専門の大平英樹先生（名古屋大学）、文化心理学がご専門の増田貴彦先生（カナダ・アルバータ大学）である。各講義の後のディスカッションのコーディネータは内田由紀子准教授が務めた。

■講義の概要

3日間の講義概要は下記のとおりである。

講義1 文化脳神経科学の視点（北山忍）

社会・文化と心理プロセスは脳を媒介として双方向的、かつダイナミックに影響し合っている。社会・文化プロセスは文化課題（cultural task）に集約され、文化課題は脳の可塑的変化の媒体となり、可塑的に変化した脳は文化課題の自発的な遂行を促し、結果として生物的適応を促進する、という考え方を紹介して、脳の可塑的変化、脳レベルでの文化の効果などに関する最新の研究を概観する。

講義2 社会・文化、生物的健康、長寿：炎症反応を手がかりに（北山忍）

炎症反応は細菌やウイルス感染等によって生体が起こす発赤、むくみ、発熱などの反応で、慢性的な社会的ストレスが恒常的な炎症反応を誘発してさまざまな疾病の原因となることが知られている。炎症反応を示す生体指標を予測する社会的要因（社会階層、個人の価値観や幸福観等）やその効果を調整する因子の特定は、疾病を未然に防

ぎ、質の高い長寿を達成するために不可欠である。この観点から行われている比較文化的疫学研究成果をもとに、健康にまつわるダイナミックな社会・生物現象を考察する。

講義3 意思決定を支える脳と身体の機能的相関（大平英樹）

不確実性が高いときには、しばしば直感や感情に基づいた意思決定が行われるが、そこでは脳と身体の双方向的な影響が選択を導いていると考えられる。神経画像と生理反応の同時測定により、そのメカニズムを探求する。

講義4 身体化された正義（大平英樹）

正義（justice）の心理学的基盤として、人間が進化的に発達させた共感を考える立場が優勢であった。しかし、近年経済学や思想において話題になっているジョセフ・ヒースの『ルールに従う』では、人間が他者と相互作用する場合に、何らかの原理や規則を創発させてしまう特性が基盤にあると主張している。こうした議論をもとに、正義がどのように、どの程度まで、進化生物学的基盤を有するのかを考える。

講義5 文化と認知：発達科学との協力に向けて（増田貴彦）

近年、文化心理学者が行っている発達研究を概観し、今後の文化研究の発展に発達科学がどのように関わってくるのかについて議論する。その中で、理論・方法のそれぞれの面において、協力関係を促進する要因、阻害する要因などを洗い出していく。

講義6 文化と表現：文化的表象研究から分かること（増田貴彦）

近年、文化心理学者が行っているアート・デザイン・広告などの文化的表象の研究を概観し、こうした研究が文化とこころの関係を探るうえでどのような役割を担うのかについて議論する。

■心の科学集中レクチャーのもつインパクト：受講生の感想から

3日間の集中レクチャーでは、各日を担当する講師による90分の講義が午前と午後であり、それぞれの講義の後には、3名の講師全員による60分のディスカッションと受講生による質疑が加わるという密度の濃い内容になっている。受講者は、京大の学生・院生・研究者が18名、他大学の学生・院生・研究者が7名で、センターのスタッフも加わり、30名がレクチャーに参加した。

受講生のアンケートには、

「最前線で活躍される先生がたの熱気ある講義・議論を目にすることができ、非常に面白い3日間だった」

「それぞれの先生のお話は三者三様で、しかも日を追うにしたがってそれらのお話を関連させるように議論が進んでいくのが大変面白かったです」

「先生方のディスカッションでは鋭く建設的な意見が飛び交い、新たなアイデアが誕生していくのを目の当たりにできたのもすばらしい経験でした」

「文化心理学の全体像、そして最先端の研究の関心がどのように推移しているのかについて深く知ることができ、とてもよい機会となった」

など、レクチャーの内容や講師陣のディスカッションから多くの刺激を受ける機会となったことがうかがえた。

心の科学集中レクチャーは、センターが実施する教育プロジェクトの柱として、今後も継続する予定である。

東日本大震災関連プロジェクト——こころの再生に向けて

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■こころの再生に向けて

平成23年（2011）3月11日、東日本大震災という、未曾有の事態が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という3つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における価値観、社会関係のあり方は、被災地ではもちろんのこと、その他の地域においても変化したと考えられる。

本研究プロジェクトでは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学・心理学のアプローチからこころの再生に向けての取り組みを行う。

■本プロジェクトのアプローチ

宗教学・民俗学のアプローチとしては、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局の「心の相談室」、島菌進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信氏が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索していく。その際、宗教的「世直し」思想と実践事例の解明とともに、21世紀文明のあり方、その中での日本文明の位置とあり方、そこにおける伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方、自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築、聖地など安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方、などに焦点を当てつつ考察していく。

■フィールド調査

2013年度は、2回のフィールド調査

を行った（5月、8－9月）。以下に集約されるように、被災地に鎮座している神社を調査する中で、東北地方の宗教的土壌の持つ意味が浮き彫りになりつつある。

①東北（陸奥国）延喜式内社100社のうち石巻市や女川町のある牡鹿半島に10社も密集している。これは地震や津波などの自然災害の多発に関係している。
②東北被災地の津波浸水線以上に多くの神社があり、避難所になっているため、安全・安全装置として機能している。
③伊豆国に92座の延喜式内社があることの意味も、地震や火山の噴火などの自然災害と密接な関係があると推測される。

④神楽や虎舞・獅子舞などの芸能が地域復興の活力や絆・紐帯となっている。
⑤日本を代表する日本三大祭りの1つに挙げられている祇園祭の発生は、貞観地震（貞観11 [869] 年）を直接的な契機としている。

⑥日本の「癒し空間」の具体例といえる延喜式内社が、自然災害の襲来に対する防災・安心・安全装置や拠点でもあった。

⑦東日本大震災の被災地区の延喜式内社との位置関係から、主要古社が海岸線に近い河岸段丘に立地している確率が高いことが分かる。日本列島に生まれた「聖地・霊場」が自然の恵みに深く依拠し、それに対する敬虔なる畏怖・畏敬の念をもって維持されてきたことの地質学的・生態学的・自然地理学的意味が再確認される。

⑧延喜式内社などの各国主要古社が縄文遺跡など先史時代の遺跡および古代遺跡と近接し、縄文時代からの信仰と切り離せない。

以上の仮説をふまえると、「聖地」と呼ばれる場所では、種々の自然災害との浅からぬ関わりを読み解くことができる。東日本大震災の被害と復興もま

た、東北地方の宗教的土壌という観点からとらえ直すことで、「こころの再生」へと向かう1つの道筋が見えてくるといえよう。

■フォーラム

研究会の成果報告として、2度のシンポジウム「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」雄勝プロジェクト・シンポジウム「Symposium in Ishinomaki-revive」（2013年8月31日）、および「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」第4回シンポジウム（2013年7月9日）を行った。

7月9日のシンポジウムでは「震災と語り」をテーマとして、4名から基調報告を受け、震災後の被災地における「幽霊の語り」「喪失の語り」「グリーンケア」「スピリチュアルケア」、そこに動いている「こころ」と「こころの再生」について議論を行った。高橋原氏と鈴木岩弓氏は「震災後の幽霊の語り」と民俗のテーマのもと、「幽霊」の目撃体験、「怪異現象」の事例の数々と伝達パターンなどについて事例紹介した。やまだようこ氏が「喪失の語り——負の体験から立ち直るナラティブ」というテーマのもと、被災地での語りの実例を紹介し、語りを生きる力へとつなげていくプロセスをていねいに紹介した。島菌進氏は「震災とグリーンケアの語り——『悲嘆』に寄り添い生きる力を引き出す」というテーマで、グリーンケアの国内での全体的な動向と、自身が所長に就任した上智大学グリーンケア研究所の大震災後における取り組みを紹介し、活発な議論を喚起した。

高橋氏の報告にもあったように、今後は、医師、社会福祉士、臨床心理士、宗教者、それぞれのアプローチから、人間を「全体」として捉えた対処法を見出すことが重要となる。

研究プロジェクト

地域の幸福プロジェクト

内田由紀子(こころの未来研究センター准教授) + 福島慎太郎(同センター上廣こころ学研究部門研究員 現在、青山学院大学総合文化政策学部助教)

日本社会の幸福においては、組織や地域における人々の関係性が主要な役割を果たすことが理論的・実証的に示されている(Uchida & Ogihara, 2012; Hitokoto & Uchida, 2014)。そして、周囲の他者との関係性により実現される幸福は、欧米型の「独立した個人」を前提とした幸福という側面だけではなく、組織や地域などの集団に応じた「集合的な幸福」として捉えることも必要になる。

そこで2013年度は、大きく、1.「農業者グループ・漁業者グループ」「地域コミュニティ」を対象にした質問紙調査研究、2. 特定の「農村コミュニティ」を対象にしたフィールド研究(実践研究)、そして3. 幸福感やつながり(社会関係資本)にかかわる講演等の活動を遂行した。以下に、各々の概要を記す。

■ 1. 質問紙調査研究

①農業者グループ・漁業者グループに対する質問紙調査

近畿・中国・四国地方を対象として、農業者ならびに漁業者に対する質問紙調査を実施した。分析の結果、メンバー同士の信頼や意見に対する寛容に代表される「ヨコのつながり」が特徴的である農業者グループのほうが、上下関係や規則の順守といった「タテのつながり」が特徴的である漁業者グループと比べて、グループリーダーの幸福感とメンバーから得られる信頼の関連が強かった。このことから、グループのつながりの形態によって、幸福感の規定要因が異なる可能性があることが示唆された。

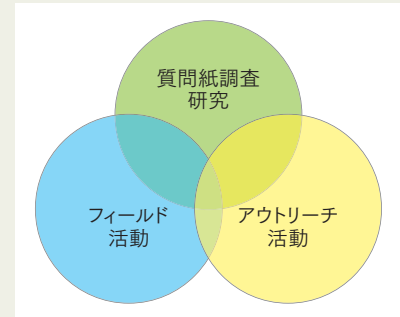
②地域コミュニティ群に対する質問紙調査

同じ日本国内においても、地域の発展や生業の形態に応じて独自の社会関係が形成されており、それぞれの地域

に特有の幸福感が形成されていると考えられる。これまでの議論では「どのような個人が幸福を感じているのか」という個人レベルでの検討が多かったが、地域の中で育まれる幸福感を検討し、「どのような地域で人々の幸福がどのように醸成されているのか、その地域差はあるのか」ということを精査していく必要がある。そこで、近畿・中国・四国地方において無作為に選定した「農村コミュニティ」「漁村コミュニティ」「都市コミュニティ」「その他の地域コミュニティ」の全世帯を対象とした質問紙調査を実施し、個人レベルでの幸福感だけではなく地域レベルでの幸福感を検討している。現在、合計413の地域コミュニティの7,365名から得た回答のデータ入力・整備が終了し、分析段階へと移行している。分析を通して、(1) 生業に応じた人々のつながりの源泉が、個人の生業としての農業・漁業のみではなく地域コミュニティとしての「農村」「漁村」にも存在すること、(2) 地域住民の幸福感はコミュニティを単位として規定されていることを実証的に示していきたい。

■ 2. フィールド研究

近年、水田や畑といった農地の利用・管理の担い手は、集落(農村コミュニティ)だけでなく、農業経営者である個人、あるいは集落とは関連しない大規模企業体へと移行してきている。農村における協力的行動が育まれてきたベースには、「集落」を単位としたコミットメントや愛着、対人関係が一定の役割を果たしてきたと考えられるが、農地管理様式の変化は協力的行動や規範意識の変化にもつながっている可能性がある。水田や畑といった農地は個人の資産であると同時に、農業を成り立たせる農道や用排水路は地域共有の資産である。土地持ち非農家が增大する中



で、緊密な住民のつながりに支えられた「農村(ムラ)」を持続するためには、集落全体で農道・農業用排水路を含んだ共有資源の管理をすることが大きな意味を持つ。

このような中、本研究プロジェクトでは、質問紙調査研究と並行して、農業集落をフィールドとした実践研究を実施してきた。具体的には、2013年度は4月より月に1回のペースで滋賀県世継集落の農業組合役員会に参加し、集落共有資源の維持・管理を含めた「農村コミュニティ」をどのようにして継承していくか、という議題に関する体制づくりならびにルール構築を行う意思決定の場に参画した。

2013年11月には、土地持ち非農家を含む集落の全戸に対する意向調査を実施し、収穫祭の実施をはじめとした次年度以降の具体的な実施計画を策定した。

■ 3. 幸福感プロジェクト成果の報告

2013年度は、国際学会発表や学術誌への投稿(Uchida, Ogihara, & Fukushima, in pressなど)を行うとともに、地域コミュニティと連携してワークショップ等を開催してきた。

具体的な活動としては、福島が京都府立図書館におけるワークショップや京都大学主催の研究者と市民の対話の場である「京都大学アカデミックデイ2013」にて発表するなど、積極的に本プロジェクトの成果を市民との対話の中で伝える活動を行っている。

心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究

前川美行 (東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科准教授)

■はじめに

現代社会では、スマホやパソコン、デザイン化された標識等の多様な記号化情報に対する即座の反応が求められる。それは日常的に直接体験や身体感覚を伴わない情報に晒されることであり、便利で豊かな生活のためにはそれらのあふれる情報を使いこなさねばならない。使いこなすことに喜びを感じ埋没する場合も、苦勞しながらの場合も、いずれも知らず知らずのうちに、身体的・認知的・心理的に自分を変化させているのだろう。特に、子どもたちは早くから記号化情報に触れ、情報処理に適した様式を身につけながら成長する。それは、おそらく認知様式や対人交流、身体面に影響を与えていくことであろう。

ところで、近年の心理療法研究でも、高度な情報処理能力に比して貧弱な対人相互交流能力、葛藤の持てなさや共感能力の低さ、イメージ表現の平板化や記号化の問題が指摘されている。そのような特徴は「意識のあり方の変化」や「境界のなさ」等、意識や主体のあり方の視点から考察されている。すなわち、意識や主体の特徴が、対人交流能力やイメージ表現（夢・描画等）に顕著に表れるともいえる。では、実際にどのようにイメージ表現は変化しているのだろうか。

■研究の目的

本研究は、このような記号化情報に対する適応や、意識や主体のあり方の問題を、実際に心理療法において表現されるイメージ表現を分析することにより検証するものである。

イメージ表現の平板化や記号化、境界のなさなどは、自閉症スペクトラムの持つ特性と類似している。それは子どもたちの中に、自閉症スペクトラムが増加していることにも表れている。

翻って考えれば、子どもたちは情報に適応した成長をしているとも考えられ、子どもたちに見られる顕著な変化は、成人における変化の先取りであると考えることができる。すでに、心理療法場面におけるイメージ表現が、従来の内容的理解や心理的成熟度理解の視点のみでは把握しきれない特徴を持つことが臨床の実感として提起され始めていることから明らかである。

さらに、近年の意識・主体のあり方の変化は、急速な情報化に伴って顕著となっただけでなく、長年にわたる潜在的变化が先行していたことが考えられる。つまり、近代からの日本社会がたどった変化、あるいは外的変化に順応しやすい主体のあり方が背景にあることが考えられるのである。

そこで本研究では、特に自閉症スペクトラムと見立てられる成人の心理療法事例の経過を対象にして、イメージ表現の特徴を分析し考察する。「自閉症スペクトラム」の特性は現代の特徴を先鋭化したものであるとの考えに基づいている。

■平成25年度の研究内容と結果

平成25年度は、臨床の実感と先行研究をもとに理論的考察を行い、問題を明確にした。そして、継続中の心理療法自験例から対象を絞り込む作業を行った。事例としては、10年以上の経過を持ち、1つの転換点を経過したと思われる事例を選び、その経過のうち、特に初期10年の変化に注目することにした。それらの継続中の事例に対して、経過に注意しながら、許諾を得る作業を順次行っている。なお、事例は、以下の特徴を持っている。①心理療法開始直後には、成人の自閉症スペクトラムという視点が一般的に乏しく、見立てが難しく、心理的機序の理解が難しい事例であったこと。②非言語的なア

プローチとして、夢・箱庭療法・描画などのイメージ表現を用いて行っていること。

選んだ事例のうち、許諾を得た事例から経過の分析を行っている。

また、近代からの日本社会がたどった変化、あるいは外的変化に順応しやすい主体のあり方に関する論考は以下のように論文にまとめた（「イメージ表現と身体性——伝統的な平面感覚と伝来の視点」、東洋英和女学院大学心理相談室紀要2014, Vol.18, pp.65-75）。その概要を紹介したい。

日本の伝統的あり方として、風景（対象）の中に入り込んで捉える関係が特徴的であると言われているが、論文では「床」すなわち「身を置く場所」、特に足を置く面を意識する特徴に注目した。次に、オギュスタン・ベルクによる「日本の空間は面的である」との論考、山口晃の「日本人は実は平面よりも奥行きを志向してきたのではないか」との指摘を引用して考察を展開した。山口は視点を動かして対象を捉える究極の形として展開図の描画を「自然な表現」と呼んでいるが、展開図の描画は自閉症スペクトラムの描画にも見られる特徴であり、視点移動や多視点構成は日本の特徴であるとともに自閉症的特徴でもあることが考えられた。

以上より、私たちは無意識的な伝統様式を用いて、描いたり解釈したりしていると同時に、意識的には与えられた描画評価基準で判断している可能性を問題として提起した。その矛盾は心理療法におけるイメージ表現描写や理解にも見られることが予想され、学習した判断基準のみによる解釈は、イメージ表現の本来持つ豊かな特性を見落とす危険すら考えられた。26年度には、自閉症的イメージ表現の特徴を事例からさらに検証する予定である。

研究プロジェクト

子どもの発達障害と作業療法

長岡千賀 (追手門学院大学経営学部准教授)

■目的

発達障害を持つ子どもの療育の1つに作業療法がある。この作業療法は、ブランコやジャングルジム、ボールやお手玉などの遊具やおもちゃが備えられた作業療法室で行われることが多い(図1)。作業療法の実践者(セラピスト)は、子どもを思うままに遊具などで遊ばせるのではなく、その子どもにとってほどよい挑戦となる活動を、子どもとの関わりのなかで考え出し、その活動に子どもを導き、活動する子どもを補助したり見守ったりする。子どもは、最初不安を持ちながらもその活動を積極的に遂行し、成功したときに達成感を経験したり自分の新たな技能を見出したりする。

作業療法のセッションが子どもにとって意味のあるものになるよう、セラピストはセッション全体の治療の流れを調節する。しかし、これを円滑に進められるか否かはセラピストの「暗黙知」に依存するため、治療的関わりの質はセラピストの技量によって異なるのが現状である。

そこで本研究では、熟達したセラピスト(以降、熟達者)による子どもとの関わり方の特性を実証研究により明らかにすることを目的とした。作業療法学の研究者と認知心理学の研究者と一緒に研究を進めてきた。



図1 作業療法室

■熟達者と非熟達者の比較:子どもの活動持続時間

熟達者と、まだ経験年数が少ないセラピスト(非熟達者)にはどのような違いがあるだろうか。比較を通じて、熟達したセラピストの関わり方の特性を明らかにすることを、本研究の第1の目的とした。このため、

まずは発達障害を持つ子ども1名に対して、熟達者が施行したセラピーと非熟達者が施行したセラピーをビデオカメラで収録し、子どもが1つの活動を継続する時間(活動持続時間)などを分析指標として分析を行った(長岡ほか, 2012, 信学技報)。

測定の結果、熟達者のセラピーのほうが非熟達者のセラピーに比べて活動持続時間が長いことが分かった。また、活動と次の活動の切り替えにかかる時間は、熟達者のほうが非熟達者よりも短かった。

さらに、子どもの発話を分析した結果、子どもの独語(他者指向でなく場面に関係ない発話で反復的常同行動の1つ)は、非熟達者との関わりのなかでは発話の約1割を占めたが、熟達者の関わりの際には発されなかったことも分かった。

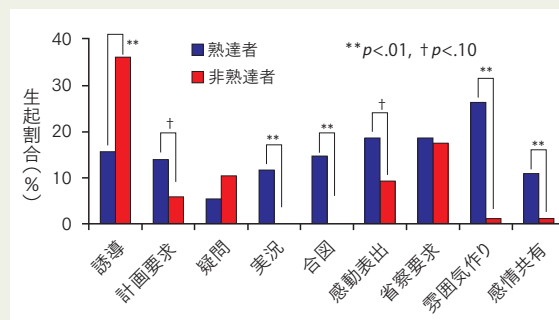


図2 セラピストの言葉がけ (生起割合は全発話に占める各機能の発話数の割合)

■セラピストの言葉がけ

上記の相違をもたらす原因の1つは、セラピストの言葉がけではないだろうか。そうした予測から、今度はセラピストの言葉がけを、発話の機能の観点からコード化した(図2 長岡, 2013, 日心第77回大会抄録集)。

結果、非熟達者は熟達者に比べて、「誘導(次の活動を提案する)」「疑問(子どもの意図を確かめる)」の発話を多くするのに対して、熟達者は非熟達者に比べて「計画要求(次の活動を子どもに選択・判断させる)」の発話が多いことが分かった。また、「実況(継続中の動作と今後の動作を確認する)」や「合図(動作を行うタイミングを示す)」をすることも熟達者の特徴であった。

■今後の展望

上記の結果から、熟達者の特徴は、子どものそのときどきの感覚や気持ち、意図を的確に読み取ることにありと推測している。今後は、他の熟達者のセラピーを分析対象とした場合も同じ結果が得られるかどうか検討する。

実践や養成場面に活かす知見を専門家や一般に発信することにより、より質の高い作業療法的支援が広まり、発達障害に関する正しい知識が一般にも伝わることを目指している。

これらの結果から、熟達者は非熟達者に比べて、子どもが適応的な関わりを積極的にできるような活動を、より早く考え出し導くことができたと推測される。

高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響

積山 薫 (熊本大学文学部教授)

■研究の背景・目的

運動習慣のある高齢者は認知症のリスクが低いことから、近年では複合的な運動介入によって認知機能低下を予防・改善する効果の検証が行われている。しかし、運動介入が神経基盤に及ぼす影響の詳細なメカニズムは、ほとんど報告されていない。一方、本研究の代表者らは先の行動実験により、高齢者において視覚性ワーキングメモリ成績が優れるほど歩行機能が優れることを見出した。そこで、運動が認知機能に及ぼす影響を、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳画像を用いて調べることにした。今回のfMRI研究では地域在住高齢者を対象として、1) 視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動で、運動能力と関連する活動を見出す横断的検討、2) 二重課題下での運動を含む介入による認知機能改善効果が、行動・脳活動データ、脳体積にどのような影響を与えるかを調査する縦断的検討の2つを行った。

■方法

シルバー人材センターを通じて募集した、地域在住高齢者52名(平均73.6歳)を対象に実験を行った。脳血管障害、変形性関節症、関節リウマチなど

の身体機能障害を有する者、および顕著な認知機能低下など精神・心理機能低下の認められる者は含まれていなかった。

全体としては、運動介入を基軸とした地域在住高齢者の縦断的研究である(図1)。まず、介入前測定として、参加者の認知機能と運動機能の評価を行った(Pre測定)。認知機能評価には全般的認知機能を測定するMMSE、Wechsler記憶検査、前頭葉機能を測定するTMTなど、5項目を実施した。運動機能評価には、10m単純歩行、目標に沿ったターンを含むTUG歩行検査、下肢筋力測定を中心に6項目を実施した。脳機能画像の測定に、こころの未来研究センターのMRI装置を使用し、ワーキングメモリ課題中の脳活動を撮像した。この課題では、顔または位置の画像を次々と提示し、N個前に見たものと同じかどうか判断してもらうN-back課題を与え、ブロックデザインによる撮像を行った。今回は1-back課題と0-back課題中の脳活動の差分をとることで、ワーキングメモリの脳活動とした。

介入前測定を参加者全員が終えると、層化無作為割り付け法によって参加者を介入群と非介入群の2群に分け、12週間の介入期間に移行した。各群はMMSEによる2名の除外者が出たため、25名ずつであった。介入として、ストレッチング、筋力トレーニング、二重課題下ステップ・トレーニング(座位・立



図2

位)などを行う運動教室を、約90分、週1回実施した(図2)。さらに介入群に対しては、介入期間中、歩数計を携帯してもらい、教室出席時に各週の平均歩数をフィードバックし、活動量の向上を促した。介入期間終了後、非介入群の中で介入を希望する参加者に対しては、同内容の運動教室を開催する。介入期間の終了後、再評価を行った。評価項目はすべて初期評価と同様であった。

■結果と今後の課題

介入前横断研究の行動データにおいては、1-back課題の正答率は、顔と位置のいずれでも、TMTやTUG歩行などと相関があったが10m単純歩行とは相関がなく、TMTやTUG歩行に含まれる前頭葉機能がワーキングメモリと共通することが示唆された。

介入前後で比較する縦断研究の行動データにおいては、介入群で1日の歩数が有意に上昇するとともに、TMT、Wechsler遅延再生課題など多くの認知機能評価項目において、有意な介入効果が認められた。

脳画像については、医師による構造画像の読影を経て、脳病変が認められた2名を除外して解析する。今後は、これらの行動データと脳活動や脳容量のデータとの対応関係を検討していく予定である。

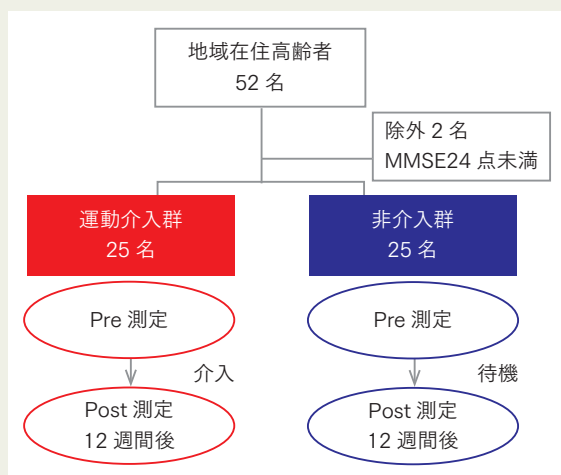


図1

研究プロジェクト

身体と象徴：自然・社会・人体のリズムの総合的研究

木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）

■研究発表と創作・実演発表

本プロジェクトでは「強弱」をテーマとして時間・空間・人体のリズムについて研究員それぞれの専門の立場から、以下のように研究発表を行った。主催：比較文明学会関西支部・京都大学こころの未来研究センター共催
開催日：2013年 11月28日
会場：京都大学稲盛財団記念館大会議室

〈研究発表〉

中牧弘允（吹田市博物館館長・国立民族博物館名誉教授）「暦のシステムにみる時間の強弱」

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）「聖地感覚と聖地文化を通して見る空間の強弱」

木村はるみ（山梨大学准教授・京都大学こころの未来研究センター連携員）「舞踊表現に見るこころの強弱：魂振り」と魂しずめ」

山本雅一（作曲家・京都大学こころの未来研究センター共同研究員）「音楽表現における強弱」

〈舞踊作品創作と実演発表〉

「魂振り」と魂鎮め」

創作・実演（オイリュトミー&ダンス）：木村はるみ 古事記朗唱・神道ソング：鎌田東二 作曲：山本雅一 衣装：池田いよ 照明：吉田一弥 協力：奥井遼・足立順子

■時間

「時間の強弱」については中牧が担当し、世界のカレンダーの紹介とともに、C. ギーアツが「順列的」と分析したバリ島の暦や祭儀が暦日の組み合わせにもとづいていること、「満」「空」の2種類の分類などを紹介し、「重要なことの行われる日」と「そうでない日」、いわば「強い」日と「弱い」日が存在することについて述べ、日本における江戸時代の不定時法（季節によって一

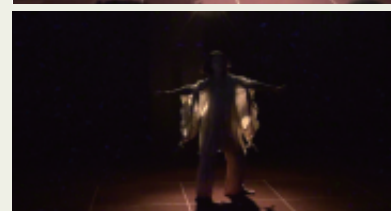
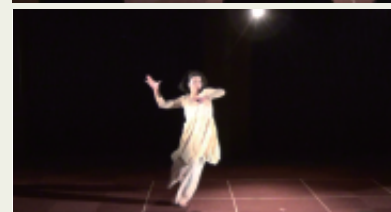
時の長さが変わる）、ハレとケ、重日などの事例から「強い日と弱い日」について論じた。また明治の改暦に際しての暦注の廃止には六曜を見出す「おぼけ暦」をつくり、時間の均一化に対しては近年、旧暦にスローライフの精神を見出す人たちが増加していることを報告した。不規則性が持つ時間の強弱への憧れ、抵抗、新しい文明への模索を暦と時間感覚から論じた。

■空間

「空間の強弱」については鎌田が4つの諸相（1. 自然、2. 神話、3. 聖地、4. 儀礼）から研究発表を行った。4枚のプレートの上にある日本列島の特異性、四方の海・山・川・平野に見る空間の強弱と岬・川の合流点・山の入口などの境界線にある神社に象徴される空間の強弱を紹介した。神話については、「古事記」「風土記」を参考として日本列島の男性的空間・女性的空間を示すとともに神霊の到来する神聖空間として厩を挙げている。聖地にみる空間では、風水における東西南北の象徴性、鬼門・裏鬼門、冬至と夏至の方位、伊勢神宮（うつしよ）と出雲大社（かくしよ）の存在、西国三十三か所、大峰吉野熊野修験七十五間廂などを挙げている。儀礼としては、四方拝、天地拝、五体投地、跳躍、バンジージャンプ、胎内潜り、洞窟儀礼、迷路を挙げ、延喜式内社と自然災害の防災拠点としての寺社の機能と役割を論じた。

■身体

身体については「舞踊」と「音楽」から考察し、木村が京都市内大田神社の芸能調査（巫女神楽）の報告と並行しながら、身体表現を通して現象する空間の生成、時間の視覚化、エネルギーの流れをラバン理論・デルサルト理論、シュタイナーのオイリュトミー理論を



木村による発表 独舞「魂振り」と魂鎮め」のパフォーマンス

紹介しつつ舞踊作品創作につなげた。

山本は作曲家の立場から音楽学的強弱表現を研究発表し「魂振り・魂鎮め」の音楽を作曲した。実演は、鎌田の「古事記 神代」の朗唱、山本の作曲した楽曲「魂振り・間奏・魂鎮め」に合わせて、木村が創作独舞「魂振り」と魂鎮め」のパフォーマンスを行い、鎌田の神道ソング「まほろば」の歌唱でまとめた。

後半には高橋悟・奥井遼ならびに参加者とともに理論・実践の両サイドから討議した。話題の焦点は人間の表現行為の「形と力」、そのエネルギー・フローであり、具体的には求心力や遠心力など力の発動する「円形」の形姿の力の再評価・再認識、「反復」、「循環」するリズムの神秘性とその人体による視覚化・聴覚化であった。この課題を次年度に継続し、時間・空間・人体のリズムを見るアスペクトに集団・形・反復・流れ・思想というファクターを導入し、場・時・身による力とシンボル生成を再考する。

被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究 II

大西宏志 (京都造形芸術大学芸術学部教授)

■はじめに

2012年度から継続している本プロジェクトは、初年度に主要な震災関連の芸術実践の調査、および研究員自身による被災地等での芸術実践を行った。これらを通して「被災地のこころときずなの再生」には、芸術家のこころと被災地のこころとの間にどのようなきずなを築き、いかに継続してゆくかが重要な課題であると分かった。2013年度はこれを踏まえて宮城県石巻市を活動の拠点とし、(1) 宮城県石巻市旧雄勝町の予備調査(5月18~20日)、(2) 京都での研究会：現地での活動内容の検討(6月25日)、(3) 旧雄勝町での芸術実践(8月30日)と石巻市でのシンポジウム(8月31日)、および雄勝法印神楽の見学と地元団体からのヒアリング(9月1日)、(4) 芸術実践の記録映像の制作とパリ建築・文化財博物館での上映(10月22日~12月22日)を行った。本稿では、(1)(3)を中心に報告する。

■被災地での活動

(1) 予備調査

『雄勝町史』(雄勝町史編纂委員会編、1966年)、『市町村合併調査事業実施調査報告書』(宮城県総務課、2002年)によると、雄勝町(1941~2005年、現在は石巻市)は、かつて「十五浜村」と呼ばれていた。雄勝地区の12の浜(雄勝浜、明神浜、名振浜、船越浜、大須浜、熊沢浜、桑浜、立浜、大浜、小島浜、水浜、分浜)と周辺の3浜(河北町の釜谷浜、長面浜、尾崎浜)が合わさり1つの行政区になったときに命名された(1889年)。地域の成り立ちやアイデンティティを感じさせるよい名前であり、この地域が浜ごとに集落をつくって暮らしていた浜連合だったことが推測された。

(3) 芸術実践とシンポジウム

旧雄勝町・大浜地区にある石神社・葉山神社(宮司：千葉秀司)で、ストーンサークルセレモニーを実施。石神社は石峰山山頂にある巨石をご神体とする神社で、平安時代に延喜式内社に制定されている。葉山神社はその里宮である。石峰山は山岳修験道の霊場でもあり、鎌田教授を先頭に8名(鎌田、須田、近藤、岡田、上林、斉、ラディック、大西)で登拝し、被災地復興を祈念して雄勝特産の硯石を奉納した。また下山した後、葉山神社の境内に硯石を使ったストーンサークルを奉納した。これは、宗教圏の智恵と方法を芸術実践に取り入れることで、芸術が持つ“こころに働きかける力”を再生する試みであった。

また、石巻開成第II仮設団地にて、「NPOしらうめ」理事長・曹洞宗香積寺住職の川村昭光氏のコーディネートのもと、『Symposium in Ishinomaki revive』と題したシンポジウムを実施した。

第1部

1. 基調講演「こころときずなの再生と地域の伝統文化」鎌田東二
2. 活動報告「硯石を使った雄勝再生プランとYATAIプロジェクト」近藤高弘
3. 活動報告「YATAIプロジェクト」ミュリエル・ラディック
4. 活動報告「宗教とものづくりとアート」岡田修二
5. 活動報告「東北の巨石信仰」須田郡司

第2部

1. 基調講演「失われたコミュニティの復活」川村昭光
2. パネルディスカッション「モデルとして雄勝の再興を考える」
パネリスト：近藤高弘、岡田修二、須田郡司、千葉秀司、大西宏志、ミュリエル・ラディック、鎌田東二(助言者)、川村昭光(司会)



■まとめ

本研究プロジェクトでは自然の恵みと伝統文化・伝統産業を結びつける「祭りの創造」を今後の目標にしたい。そのときのポイントになるのが浜と海上交通である。雄勝周辺の浜は複雑に入り組んだリアス式海岸が特徴である。このことが津波の被害を大きくしたが、変化に富んだ美しい景観を作りだしている。ここには12の浜があり廃絶したものもあるが、それぞれ神社と祭りを持っている。これらをうまくネットワークできれば、四国88ヶ所巡りのような聖地巡礼のスポットになる。かつての海上交通を観光用に復活させ、12の浜の伝統文化を巡るツアーがつかれないか。また、アート・イベントと組み合わせさせてアート・ツーリズムを育てることも可能だろう。

自然の景観だけではなく町並みもまた観光資源になる。震災以前は屋根や壁に硯石を使った美しい家があったが今は残っていない。硯石の粉末を塗料や漆喰に混ぜた壁材を開発し漆黒の町並みを実現できれば、これを目当てに観光客がやってくるだろう。低コストで扱いやすい建材を開発して復興住宅の壁や屋根に使うことで、町並みが観光資源に変わる可能性が生まれてくる。